

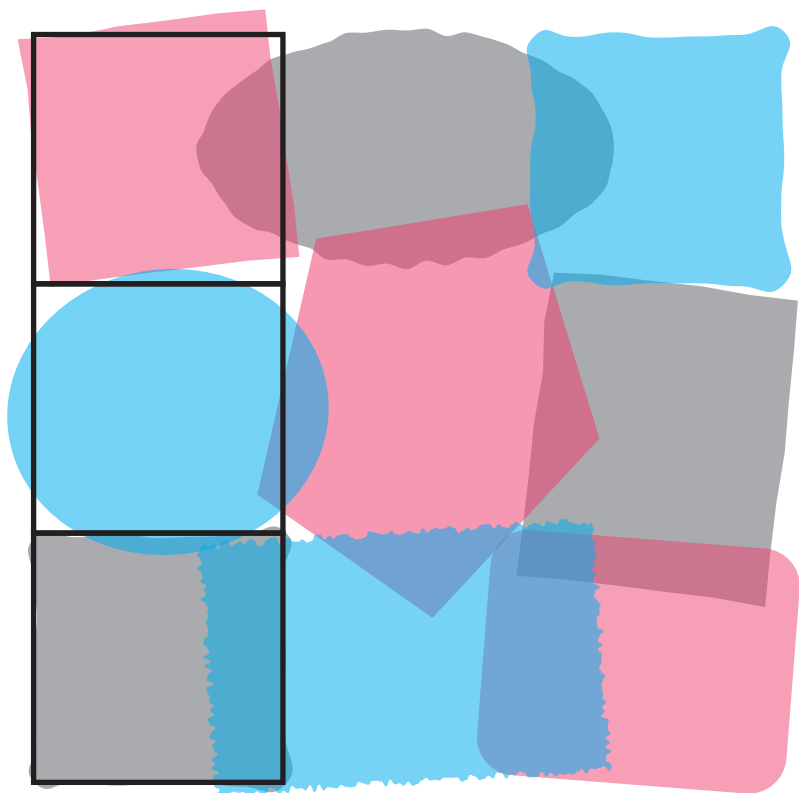
詩誌  
極微

ShiShi - Kyokubi

VOL. 7

佐野 豊  
小田原 慎治  
篠田 翔平  
森田 直

TAKE  
FREE



詩誌極微 vol.7

## 夕方

森田直

正面からくる人を

よけきれなくて

たち止まり

柱になる

やりすごし

ほどけても

柱はのこるので

わたしたちは わたしたちの柱でもって

いつかこの町から 出られなくなるだろう

とうめいな無数の柱がささえる

てんじょうのむこうから

夕方

なにかがおりてきては

きらめいていて うつくしいよ

と

わたしたちと わたしたちの柱とを

ねぎらつては去っていく

わたしはもう それに腹をたててばかりいて

わたしたちの柱の

実際のうつくしさ とか

それが角柱であるか円柱であるか とか

ななめから夕陽に深く刺されるとき  
の音 とかに  
おもいあたることはない

柱をつらぬいた夕陽が流れて

ひろがって

ひろがって

ひろがっていくのに

夕方はいつも

あっけなく暮れてしまう

ねえ てんじょうへ去るもの

あなたは

なにもぶつからず

まっすぐに夜をかえっていく

そうですね？

## ある状態

小田原慎治

格安携帯電話会社からの  
重要なお知らせ には  
それほど負担ではない  
いくばくかの金額が  
明示される  
これを支払う  
約束だ

だがおれは  
それが嫌な感じがすることがある  
それは悪いことだ  
契約がだから

無効だというのではなく  
守るべき約束を守るのが  
嫌だと感じることに

ある状態にいるのかもしれない  
たとえば  
山のふもとの公園で  
ふと山林との境から奥へ  
駐車場が遠くなるのに  
歩みだす足を止めようとしな  
い  
状態のなかに

たとえばそれは 悪いことだとわかりながら  
手前の不服を先方へ通知する方法がないとき  
しないよりもするほうが「良い」のではないか

とおもう状態のことだ

約束には

少なくとも二つの人心が

賭けられているとおもっていた

状態のことだ

## I never dreamed

佐野豊

歌でない部分で

涙は出てくる

間奏のギターのところ

その数秒間に

いろいろあつたがキュッと

押し込められている

しまっておいた

覚えなどないのに

思い出す

ましてバラードでも

泣きのギターでもない

職人がいつもの仕事を

黙々とこなしていくような音

それは泥臭い

アメリカ南部のスワンプロック

父が所有したレコードの

とあるアルバムの一曲

涙の訳は

父に ということでもなく

ぼくもまた

この淡々と

脈々と続いている

ブルースを

引き受けてしまっていることに  
泣いたのだ

— 夢にも思わなかった —

これが

その曲のタイトルである



## 晴夜

篠田 翔平

夕立がやんで、七夕の夜は晴夜になる。あなたは  
願いでほてった笹の葉たちを

川床にさらして歩いていく。数え切れないほどの願いが、

星を映す川面で、悲しくなくなるまでの、遠い時間を待っている。『星たちは、  
地上のひとがその名を、姿を、あとかたもなく忘れたあとで、

星座の枷をそつとはずして、

朝焼けにかすむ天の川をめいめいに渡っていく。』あなたの小さな物語を

覚え切れない色の名で撫でていく。(くすぐりたい。)水に落とす絵の具のように

髪が、ゆるやかな坂道のうえに流れる。

(Tシャツの汗。スイカの赤い染み。)鼻を押し付けると、

あなたの匂いが、あふれるようによみがえってくる。せきとめる指の隙間を抜けて

空までのぼる花火を見上げていた。「生きてるのかな、わたしたち。」

思い出のなかの花火は、音がないから、私たちは互いの鼓動に、じっと耳をすましている。

「年金、払わないつもりでしょ。」この町で、

「…ねんきん？」白髪になった私たちが、あの坂道をのぼっていく。(あのころは、

立ちこぎで行ったよね。)——なんて。

「にゅうどうぐもだ。」覚えてたのことばを使いたくて、

どんな雲も、入道雲にして、やがてくる夕立をふたりで待っていた。

(わたしが生まれた日も、夕立がふったんだって。)やわらかくふやけた紙テープをちぎるように、

あなたの濡れたひとみが

私はまだ生まれていない世界を眺めている。(そらが、

あおかったよ。)私の知らない夏を

あなたは、ひとつだけ知っている。(せみが、なっていたよ。)そんなちいさな差異を、

私たちは、一生の宝もののように抱えて生きていくだろう。

「この坂を越えたら、この日の記憶は終わる。」ふりむいて、あなたが言う。「そしたら、

また、しばらく会えないね。」濡れた前髪が、おでこにはりついで

そこからたれた汗が、あなたの輪郭をなぞる。私たちは

(輪郭のむこうの空。まだ、名前を知らない星座。)つないだ手がはなれるまでの、「えっ?」「

「あしたは、もっとあつくなるって!」遠い時間を

ひとときで駆けおろる。

## 編集後記

前号から一年が経ってしまった。そして一年を費やし極微としてお届け出来るのは、各人たった一編の詩である。しかし種明かしをすれば始めから、そのような狙いで7号が出来たわけではなく、何度も打ち合わせ（オンラインミーティング）を経て、やっとの着地だった。前号とは違う意味で難産であった。しかしながら顔をしかめていたわけではなく、我々はよく和やかに笑った。ミーティングでの詩のはなしをいつかなんらかの形に出来たらと思う。次号も楽しみにして頂けたら幸いです。（佐野）



佐野 豊（さの・ゆたか）

1984年生。第10回びーぐるの新人。詩集に『風』（花椿文庫）。

小田原慎治（おだわら・しんじ）

1983年生。神奈川県出身。

篠田翔平（しのだ・しょうへい）

1989年生。去年、詩集『おくりもの』を七月堂より刊行しました。

森田 直（もりた・なお）

1989年生。神奈川県出身、東京都在住。会社員。

## 詩誌極微 VOL.7

発行日 —— 2022年3月20日

発行人 —— 佐野 豊

発行所 —— 佐野書房

表紙印刷 —— レトロ印刷

連絡先 —— shishi.kyokubi@gmail.com

H P —— <https://shishi-kyokubi.jimdofree.com/>

